

| | |
|---------|--|
| 氏名 | 荒川 恵美子 |
| 学位の種類 | 博士（心理学） |
| 学位記番号 | 院博甲第 17 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 30 年 3 月 16 日 |
| 学位授与条件 | 学位規則第 5 条第 1 項該当 |
| 学位論文題目 | NICU 入院経験児をもつ夫婦における関係性の心理的プロセス |
| 論文審査委員 | 主査 新井 邦二郎 東京成徳大学大学院 教授 副査 中村 真理 東京成徳大学大学院 教授 石隈 利紀 東京成徳大学大学院 教授 西村 昭徳 東京成徳大学大学院 准教授 |

1. 論文概要：(1) 目的, (2) 方法, (3) 結果及び考察

本研究の目的は、NICU 入院経験児をもつ夫婦が妊娠中・NICU 入院中・退院後の各時期においてどのような思いを抱くのか、その心理的プロセスを明らかにすることである。そのために、以下の 4 つの研究を行った。

研究 I：わが国における夫婦の関係性についての研究動向

(1) 目的：妊娠期から育児期までの夫婦において、夫婦の関係性をどのように意識しているか、夫婦関係に影響を与える要因は何か、夫婦の関係性における調整などについて明らかにすることを目的とした。

(2) 方法：医学中央雑誌, CiNii にて「夫婦関係」「子育て」「育児」「調整」をキーワードに、1987 年から 2016 年の原著論文を検索した結果、34 編が抽出された。その中から量的研究論文 16 編と質的研究論文 6 編、内閣府・総理府・厚生労働省の統計調査結果に基づく報告書など 6 編をレビューの対象とした。

(3) 結果と考察：選定した論文を心理学研究者 2 名とともに協議し整理したところ、「情緒」「メンタルヘルス」「役割」「サポート」という 4 つのカテゴリーが抽出された。項目別に概観すると「情緒」では、出産前と出産後では夫婦の情緒的な結びつきや夫婦関係に対する満足度が産後に有意に低くなり、子どもの養育態度にも影響を及ぼすことが明らかとなった。「メンタルヘルス」では、夫の妻に対する情緒的サポートが妻のメンタルヘルスに関連しており、妻の自尊感情を高めるような夫のかかわりが夫婦愛着を促進することが明らかとなった。「役割」では、妊娠の時期、夫婦関係満足度、夫婦の行動面・情緒面の伴侶性が役割獲得に影響を与えていた。「サポート」では、夫からのサポートと妻の満足度はサポートの有無、回数、時間の他に会話の内容や自尊感情、夫婦それぞれの精神的健康度なども関連があることが示された。

研究Ⅱ：NICUに入院した子どもの父親における心理的プロセス

(1)目的：第1子がNICUに入院をした経験をもつ父親にインタビューを行い、妊娠中から出産、NICU入院中、退院後1年までの期間に父親がどのような思いを抱いていたのか、またその思いがどのように変化していくのかを明らかにすることを目的とした。

(2)方法：調査期間は、2008年4月から9月。調査協力者は、第1子がNICUに入院経験をもつ父親5名で、半構造化面接によるインタビューを行った。インタビュー時間は1人60～90分程度、録音したインタビューデータについて「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」を援用して分析を行った。

(3)結果と考察：妊娠中、NICU入院中、NICU退院後の時間の流れのプロセスでは【父親自覚の萌芽】【緊迫感の中での父親体験】【医療から離れた不安と困難】【父親に慣れていく】の4カテゴリー、それらに影響を与えるものとして【夫としての援助者役割】【支えられることを味わう】【父親である実感】【医療者への感謝と不満】【父親に慣れていく】の4カテゴリーが生成された。

このことから、NICU入院は負の出来事であるが、本研究の5人の父親はそれをプラスの方向に転じていったことが窺えた。しかし、それは5人の父親の精神的強さ、家族や友人のサポートに支えられた結果であったかもしれない。

研究Ⅲ：夫婦の思いの違いと調整に関する調査

(1)目的：第1子出産前後における夫婦の思いの違いとその調整の方略を明らかにすることを第1の目的とした。さらに子どものNICU入院経験の有無が、第1子出産前後における夫婦の思いの違いと調整の方略とどのような関連があるかを検証することを第2の目的とした。

(2)方法：調査期間は2016年6月から2016年11月末。調査協力者は、保育園に子どもを通園させている夫婦146組（NICU入院経験あり24組）であった。質問紙の構成は、夫婦関係意識尺度、関係焦点型コーピング尺度、夫婦関係尺度であった。

(3)結果と考察：二要因混合計画による分散分析の結果から、妻が夫より得点の高かったのは「出産・育児への期待」であった。産前のみ妻が夫より得点が高かったのは「経済・生活の充実」「夫(妻)の支援・信頼」と「親密性」「頑固」「積極的關係維持」であった。一方、夫が妻より高かったのは「我慢」と「我慢・譲歩的關係維持」であった。また夫婦共通の特徴として夫婦合わせて全体の平均を見ると、夫婦共に「パートナーの受容」「育児への期待」「親密性」で産前は得点が高く産後は低くなった。「夫(妻)の支援・信頼」では、産後で得点が高くなった。「経済・生活の充実」では夫のみが産後に得点が高くなり、「頑固」は、妻のみ産後の得点が高くなった。また点双列相関係数からNICU入院経験の有無は妻の尺度得点と中程度以上の相関を示したものが多く「出産・育児への期待（産前・後）」「経済・生活の充実（産前・後）」「夫

への支援・信頼（出産前）」「親密性（出産前）」「頑固（出産後）」で、いずれも、NICU入院経験があるほど得点が低いことが明らかになった。夫では、「妻の支援・信頼（出産前）」のみ中程度以上の相関が示され、NICU入院経験があるほど得点が低いことがわかった。

研究Ⅳ：NICU入院経験児をもつ夫婦における思いの違いの心理的プロセス

(1)目的：NICU入院経験児をもつ夫婦それぞれが、妊娠からNICU入院を経て退院後1年くらいまでの間にどのような思いのプロセスをたどったのかについて語ってもらい、その内容の分析を行う。さらに分析結果をもとに妻と夫それぞれの心理的プロセスを明らかにし、夫婦間で比較することによって「夫婦の思いの違い」を明らかにすることを目的とした。

(2)方法：調査期間は、2016年9月から2017年3月。調査協力者は、NICU入院経験児をもつ夫婦10組で、半構造化面接によるインタビューを行った。インタビューでは、「妊娠中」「NICU入院中」「退院後1年くらいまで」の夫婦の思いについて語ってもらった。インタビュー時間は1人60~90分程度、録音したインタビューデータについて「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」を援用して分析を行った。

(3)結果と考察：最終的に採用したカテゴリーと概念の一覧及び概念生成時にデータから得られた具体例（バリエーション）からワークシート作成した。サブ概念は妻106、夫116。概念は妻32、夫40。カテゴリーは妻21、夫19。領域は妻4、夫4となった。

4つの領域別に夫婦の思いの違いをまとめると、次のようになった。

[夫婦への思い]：妊娠中の妻は【夫との関係再発見】をしている。夫は協力的に支えてくれる存在であるが、なかなか頼みにくい存在でもあった。一方、夫は【妻への気づかい】をしている。妻の気持ちを尊重し、できる限り協力しているが思いはあっても言葉で伝えられないと感じている。入院中の妻は【夫への苛立ち】を感じている。冷静を装い、がんがん言うと引いてしまう夫に妻は苛立っている。一方、夫は支え方が分からず混乱しているが、寄り添う努力をしている。退院後の妻は、【夫への苛立ち】を継続させているが、夫への感謝の念も持っている。一方、夫は妻の【産後の心身への配慮】をしつつ妻と二人で育児を始める。

[わが子への思い]：入院中の妻は【リスクのある出産】を終えた直後、まだわが子に会えない状況で、夫からわが子の説明を受けて安堵している。一方、夫は安堵している妻に、医師から聴いた障害のリスクを伝えられない思いを抱えている。退院後の妻は<慣れない育児との戦い>が始まり、<ケアを伴う育児>に疲れ果てるが、<障害児の親として生きる決意>をする。一方、夫は<ケアを伴う育児>が始まり<育児を担い続けるつらさ>を感じるが、【今後の展望】も開けてくる。

[医療への思い]：妻は【告知による動揺】や【医療者への不満】を抱き、これから

もくつながり続ける医療>に対して不安を持っている。一方、夫は【医療者との温度差】を感じ、<医療者への不信>も芽生えるが、同時に<医療者への感謝>の思いも感じられるようになる。

〔日常への思い〕：妻は退院後は【ケアを伴う育児】を自分だけで背負うには負担が重すぎるため【協力者に頼る】ことを考え、【日常となるケアを伴う育児】をわが子とともに過ごす。一方、夫は<家事の負担><仕事への影響>が不安になる。また、ケアを伴う育児には<協力者との関係>構築が不可欠であると考え、【協力者との関係バランス】を保つよう努力している。

以上のように、わが子が NICU に入院するという事は、夫婦にさまざまな思いの違いが発生する危険性が高まる。そのような中で、夫婦としての関係性を支えるための臨床心理士としての課題は多い。しかし、思いの違いが明らかになることによって「思いの違いに焦点をあてた心理的サポート」を行うことができる。本研究では、夫婦にとって違いがあることが危機なのではなく、違いを理解していないことが危機なのだということを示すことができたと考える。

2. 評 価：

本研究は4部から構成されていて、研究Ⅰではわが国における夫婦の関係性についての先行研究をまとめ、研究Ⅱでは NICU に入院した子どもの父親における心理的プロセスについて質的研究を行い、研究Ⅲでは一般の夫婦の思いの違いと調整に関して質問紙調査を行い、研究Ⅳでは NICU 入院経験児をもつ夫婦における思いの違いの心理的プロセスについて質的研究を行った。各研究間のつながりを踏まえた考察が十分とは言えないが、博士論文の全体構成としては整っている。

また、NICU 入院経験児をもつ夫婦に関する研究では、夫と妻について別々の研究は多いが、夫婦のペアデータによる質的研究はほとんど行われていない。本研究で夫と妻の両方の妊娠中・NICU 入院中・退院後における心理的プロセスを明らかにし、夫と妻の思いの違いを比較することで、どの時期にどのような心理的サポートが必要なのかを明らかにしたことは意義があると考えられる。

本研究は、筆者の10年余りのNICUにおける心理士としての経験から、わが子がNICUに入院した両親の夫婦の関係性の過酷さを何とかしたいという思いが根底にある。その思いが先行し、論の展開にやや飛躍した個所が散見された。しかし、2010年の「周産期医療体制整備指針」の改正により、NICU内の心理士の位置づけが明記され、その果たすべき役割が期待されている中で、NICU入院経験児をもつ夫婦それぞれの思いを明らかにした点は評価できる。この研究の成果を臨床現場で生かし、さらに精緻な理論の生成へと発展することが期待される。

3. 最終試験結果：

平成 30 年 2 月 10 日、公開において、論文提出者より報告を受け、質疑応答が行われた。その結果、最終試験に合格と判断された。

4. 結 論：

論文審査と最終試験結果の評価に基づいて、本論文は博士の学位に値すると判断された。

平成 30 年 2 月 19 日